

2024年1月14日（顕現後第2主日、B年）

牧師メッセージ

「来て、見なさい」

（ヨハネによる福音書 1:43-51）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音書は、フィリポとナタナエルの召命物語です。「出会い」にはいくつものレベルがあります。ただ自己紹介をし合うだけの「出会い」もあれば、相手に心底惚れ込んでしまうほどの「出会い」もあります。今日の箇所では、フィリポもナタナエルも、イエスの弟子になってしまうほどの出会いを経験しました。ヨハネによる福音書は、今日の直前の箇所のアンデレの召命の箇所でも、イエスとの真の意味での出会いの大切さを伝えています。これらの召命物語を通して、ヨハネ福音書はイエスとの真の意味での出会いへと、わたしたちを招いているのです。

では、イエスとの真の出会いとは、どうしたら起こるのでしょうか。今日の箇所によれば、イエスとの出会いは、「見る」ことによって始まります。ナタナエルの「ナザレから何か良いものが出るだろうか」（1:46）という言葉に対し、フィリポは「来て、見なさい」と言いました。ナタナエルは自分の培ってきた知識や常識から事態を判断しました。それゆえに、直接「見る」という行動まで身を起すことができませんでした。しかし、それらを一旦おいて、「見る」ことが「出会い」には不可欠なのです。たとえば、先入観を持って相手を見てしまうことで、相手の姿や本質を見誤ってしまうことがわたしたちの日常の人間関係にも往々にしてあることですが、イエスとの出会いにおいてもそうであるということです。自らの常識や知識を一先ずおいて、「見る」こと。これにより出会いは始まるのです。

そうしてイエスを見る時、イエスの眼差しが自らに向けられていることをわたしたちは知ることになります。なぜなら、イエスとの出会いはイエスによって先に見つけられているからこそ起こるものだからです。フィリポもナタナエルもイエスに先に見つけられていました。彼らはただ、そのイエスを「見る」ことだけで十分でした。このように、自分を見つめているイエスの眼差しを感じ、その眼差しの方へと目を向けると、イエスとの真の出会いは起こるのです。その眼差しは、十字架上で自らの命を賭けてまでもわたしたちを愛し抜いてくださる眼差しです。フィリポもナタナエルも、自分を先に見つけたイエスの眼差しから、そこにある深い愛を受け取ったのです。ただ、それがなにかはっきり分かったわけではないでしょう。けれども「弟子にしてほしい」と願うほどに、心動かされる眼差しが自らに向けられていることを、彼らは確かに知ったのです。

その眼差しに込められた愛に留まるところに、わたしたちもまた弟子たちと同じように、本当の救い主として、イエスと出会うことができます。「わたしに従いなさい。」というイエスの招きに応えるということは、イエスの眼差しに込められた愛を知り、自らも愛に生きようとするということです。イエスと真に出会い、愛のうちに生かされるために、たとえ疑いのなかにある時も、フィリポの「来て、見なさい。」という誘いの言葉を忘れずにいたいと願います。